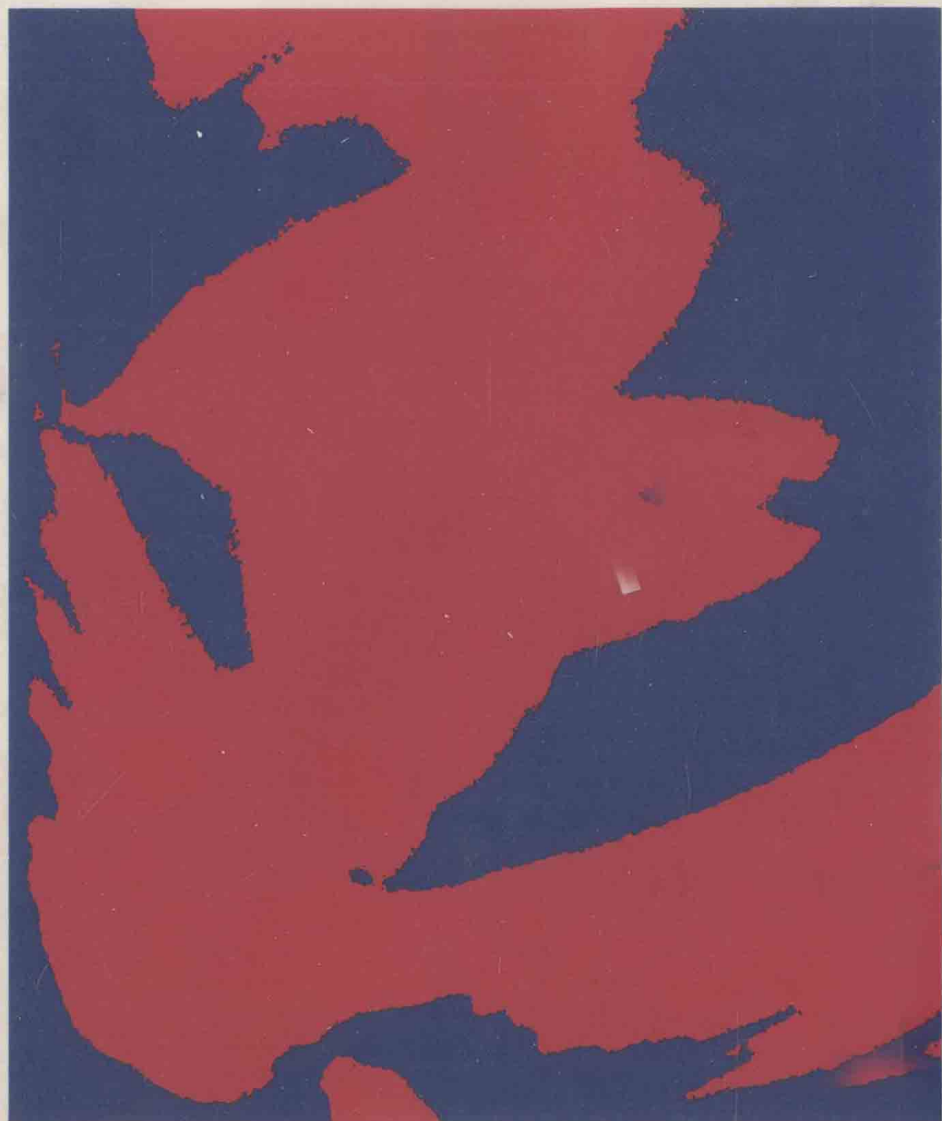


下剋上の文学

佐竹昭広



下剋上の文学

佐竹昭広



筑摩書房

下剋上の文学

一九六七年九月三十日 初版第一刷発行
一九八二年十二月十日 新装版第一刷発行

著者 佐竹昭広

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一・七六五一（営業）

二九四・六七一一（編集）

郵便番号 一〇一・一九一

振替 東京六・四二二三

多田印刷・和田製本

© SATAKE AKIHIRO 1967

0091-82006-4604

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担でお取替いたします。

佐竹昭広（さたけ・あきひろ）

一九二七年 東京に生まれる。

一九五二年 京都大学文学部国文科卒業。

現在 京都大学文学部教授。

著書 『民話の思想』（平凡社）

『酒呑童子異聞』（平凡社）

『萬葉集抜書』（岩波書店）

目次

怠惰と抵抗——物くさ太郎——

成り上がり——一寸法師と物くさ太郎——

無知と愚鈍——物くさ太郎のゆくえ——

*

弱者の運命——御伽草子と狂言——

勝利の歌——狂言の主従——

嘲笑の呪文——狂言の山伏——

有世の面影——狂言の陰陽師——

喜劇への道——狂言の「をかし」——

転落の序章——天正狂言本「こけ松」のばあい——

★

下剋上の文学——民話のクツチャネたち——

あとがき

261

230

209 187

下剋上の文学

益田勝実氏に

怠惰と抵抗

——物くさ太郎——

一

すべて勤勉な人間は互いに似かよっているが、怠惰な人間はそれぞれに怠惰のおもむきをことにしているものである。

信濃の国つかまの郡あたらしの郷はごったがえしの騒動であった。国司の命令で、「長夫^{ながぶ}」という長期の夫役を一人、急に都へ派遣しなければならなくなったからである。村人たちはその人選にゆううつな毎日をついやしていた。こんな貧乏くじをいっただれに押しつけようというのだ。できることならだれにも押しつけたくない。だが、どうしてもだれかにいってもらわねばおさまらない。その日も結論はでなかった。でるだけの意見はとうにでつくしていた。そのとき、一人の男がふとこんなことをいいた、「あの物くさ太郎はどうだろう。」

この三年来、あたらしの郷では、物くさ太郎という希代の怠け者をやんでいた。それは泣く子

もだまる地頭殿のお触れによるものであった——「この物くさ太郎に、毎日三合、飯を二度食はせ、酒を一度飲ますべし。さなからん者は、わが領にはかなふべからず。」どうしてこんなお触れがでるようになったのか、その事情はこうである。

物くさ太郎ひぢかす、かれは、竹を四本たて、こもをかけたみすぼらしい小屋に、きたない恰好をして、いつもごろりと寝ころんでばかりいた。なにひとつ自分でしようとはしない。食べ物がなければ、四日でも五日でも寝たまま動くけはいさえない。かわいそうにおもって、餅をめぐんでくれる人があった。太郎は五つのうちの四つを一度にたいらげた。それで満腹したかれは、残りの一箇を手にとって、あおむけになった胸の上で、はじいてみたり、鼻の油をぬりつけてみたり、なめてみたり、額の上にのせてみたり、遊んでいるうちに、おもわずとりはずし、餅はころころと大道の方へころがっていった。起きあがってとりにゆくのはおっくうだ、人が通るまで待っていようと、手もとにあった竹竿で餅をねらう犬や鳥を追いはらいながら三日という日をすごす。三日たったつぎの日、はじめて人がやってきた。それもただの人ではない。郷の地頭、あたらしの左衛門尉のぶよりである。立派な馬にまたがり、五、六十騎の従者をしたがえたかれは、鷹狩の途中、偶然ここを通りかかった。太郎は、一行をうるんな目つきで迎えながら、起きあがりもせず、やおら鎌首をもちあげ、その餅を拾ってくれと地頭に呼びかけた。もとより地頭は目もくれない。太郎が憤然という、「あんまのくさは見たことがない。馬からおりて餅を拾うくらいなんでもないではないか。あれでよくもまあ地頭がつとまるものだ。」相手は地頭である。ふつうならば、どんな目にあわされてもしかたのない

ところである。が、地頭はどうおもったのか、わざわざ馬を止め、かねて聞き知ったこの有名なものくさ男にことばをかけた。

「さておのれはいかやうにして過ぐるぞ。」

「さん候。人の物をくれ候時は何をもたぶる。くれ候はん時は、四、五日も十日ばかりもただむなしく過ぎ候。」

「さてはふびんの次第かな。命助かる支度をせよ。一樹の蔭に宿るとも、一河の流れを汲むことも、他生の縁となり。所こそ多きに、わが所領のうちに生れあふこと、前世の宿縁なり。地をつくりて過ぎよ。」

「持ち候はん。」

「さらば取らせん。」

「ものくさく候ほどに、地もほしからず候。」

「あきなひをして過ぎよ。」

「もとで候はず。」

「取らせん。」

「今さらならはぬこと、知らぬこと、なりがたく候。」

世にも珍妙なやりとりをしているうちに、ものずきな地頭は、太郎の徹底した変人ぶりに、ひょっと一種の好感をいだいてしまったらしい。「さてはかかるくせ者かな。いでさらば助かるやうにせん」

というわけで、みずから無為徒食の保証をかれにあたえる結果となったのである。いつにかわらぬ地頭殿の気まぐれに、村人たちは眉をしかめたけれども、しよせん「あはぬは君の仰せ」である。それからというもの、こんにちまで三年間、村人はこの厄介者を、ともかくもやしないつつけてきたのだった。

あのものくさがなんの役にたつ、村人は太郎を長夫に派遣したらというおもいつきを、まじめにとりあげる気にはなれなかった。しかし、すでに万策はつきている。太郎のほかに暇とからだをもてあましている人間など、村には一人もないのだ。かんがえてみれば、ながいあいだ、無駄めしを食わせておいた男だ、こんなときの役にたてば面倒をみてやったかいもあるし、荷厄介な無用者を村から追いはらってしまうにはまたとない機会でもある。ひとつあれをうまくまるめこんで、都へゆかせるとしよう。村の長老おとこが説得にでむいた。助力を乞うたり、いままでの恩をきせたりしてすすめたが、さっぱり応じない。そこで一人の長老が、田舎とちがって、都にはやさしいきれいな女がたくさんいる、そのなかから氣にいった女を妻として、おまえも一人前になってきてはどうだ、と知恵をつけると、さすがのものくさがにわかに乗り氣になって、そくぎに上落を希望したという。村人は大よろこびで道中の費用を集め、とうとうかれを旅だたせることになった。「男どんだは江戸へもやれど、女のどんだはどもならん」(石川県河北郡雜謡『日本歌謡集成』卷二「近世篇」)ではないが、こうして室町時代の「どんだ」⁽¹⁾も、まんまと都へやられるはめになったのである。

太郎をおくりだした村人は、あの札つきの怠け者が、都へのぼってどんな長夫をつとめるやら、ど

んな失敗をしでかすやら、想像すればするほどおかしくてたまらなかっただろう。われわれ読者の期待も、もちろんこの一点につながれている。しかし、読者の期待はみごとに肩すかしをくうし、村人は後日かえってきた太郎の晴れ姿を見て肝をつぶす。

かれが発見してから、村にはふたたび静かな日々がもどってきた。なにかもともと通りであった。もと通りでないのは、京へのぼった物くさ太郎だけであった。物くさ太郎の内部には、ヘンリー・ジキルが突然エドワード・ハイドに変身したのとおなじような転換の奇跡がおこっていた。すなわち、京へのぼるや、かれの性格は、俄然、従来の「ものくさ」をかなぐりすて、正反対の「まめ」に一変してしまった。かれは国司の館でひたすら「まめ」にはたらき、「すこしもものくさげなるけしきもな」かった。「これほどまめなる者あらじ」、これが怠け者物くさ太郎の都で受けた賞讃であった。

二

「ものくさ」がほんとうにまともになったのでは、おもしろくもおかしくもない。たぶんそのためである。平出鏗二郎は『近古小説解題』に「物草太郎が上京して後は全く別人の如くなりて、少しも物ぐさからざるは面白からず」と評し、藤岡作太郎は『鎌倉室町時代文学史』に「はじめの方おもしろし、後半は物臭といふ性格を忘れたるが如し」と評している。だが、はたしておもしろいのははじめの方だけで、後半は全然つまらない話でしかないだろうか。おもしろさは、存外「前半と後半との運命の相違の意外な点に存する」（野村八良『室町時代小説論』）ではあるまいか。しばらく物語りに

そつて太郎の行動を追うことにしよう。

三か月の長夫は延長されて七か月におよんだ。怠け者だったからではない。「まめ」で役にたつ男だったからである。国をでたのが春のおわり頃、七か月のつとめがあけ、そろそろ暇をもらう時期がきた。もう十一月であつた。かれは国をたつときに長老からいわれたことばを忘れずにいた。よい妻をめとつて帰国するということである。宿の主人に相談すると、主人はあきれて笑いながら、けつきよく「辻取り」をするよりほかにはあるまいと答えた。「辻取り」とは「男も連れず、輿車にも乗らぬ女房のみめよき、わが目にかかるをとる事」である。

一、辻捕事

右、違犯之者、任御式目、於侍者、百ヶ日可令籠居、雑人者、或剃除片鬘片髪、或可召
籠二矣（『新御成敗状』、仁治三年正月一五日）

世が世なら右の禁制が物をいう。しかし、乱世のいまはちがう。それどころか、「天下の御ゆるしにて有なり」、主人はそうかれに教えた。

月の十八日は観音の縁日である。⁽³⁾毎月この日、清水の観音は老若男女貴賤都鄙の参詣人が袖をつらねる。昔、武蔵坊弁慶が、清水の舞台で長刀を振りかざし、御曹子義経と渡りあつたのも、たしか六月の十八日、縁日の日であつた（『義経記』卷三「弁慶義経に君臣の契約申す事」）。

三月十八日に、ひめぎみたち、きよみつへ参り給はんとありければ、（『ふせや草紙』上）

とゝろきのはしのかたを見やれば、おりふし十八日のことなるに、くはんをんにまいりけかうの

きせんかすをしらす『小おとこ』

ふしみの里に年久しう此清水に月参りせるもの有、時もこそ有、時もこそあれ、正月十八日午の日の事になるに、洛中洛外、貴いやしき、此山に歩をはこび侍しに、『是薬物語』上

氣にいった女をえらぶには観音の縁日がいちばん適当だ。物くさ太郎が、さしあたり十一月十八日を期して、清水での「辻取り」を決意した理由はここにあった。のみならず――

のみならず、清水の観世音は、俗に「妻観音」とも呼ばれ（狂言「いもじ」⁽⁴⁾）、祈念する者に妻をさずけたまうありがたい観音であつた。その日、その所において、最良の妻をうる機会があろうはずはなかつた。

いよいよ十一月十八日である。清水の社頭についても、かれは狂言の主人公のように、観音のお前にぬかずいて、「なにとぞよい妻を授けて下されい」などとは一言も祈らない。なにしろ、暴力でこのみの女を奪いとうというのだ。頼む力はただ自分だけにある。ずばぬけた主体性の持ち主だといわねばならない。

其の日のありさまは、信濃より年をへて着たりける、さゆみのかたびらの、なに色とももんも見えぬに、わら繩、帯にして、物くさ草履の破れたるをはき、呉竹の杖をつき、十一月十八日のことなれば、風はげしく吹きていかにも寒きに、鼻をすすりて、清水の大門に焼け卒都婆のごとく立ちずくみにして、大手をひろげて待つところに、参り下向の人々これを見て、あな恐しや、なにを待ちてかやうにはあるらんとて、みな／＼よけ道をして通れども、近づく者はさらになし。

あるひは十七、八、二十よりうちの女房、五人十人うち連れ／＼通れども、一目よりほか見ざりける。かやうに立ちたる事、あしたより其の日の暮るるまで、人数幾千万といふ事なし。あれも悪し、これも悪しとためらひぬたるところに――

ついにすばらしい女房があらわれた。年は十七、八、一目見た刹那、かれは直覺する、「ここにおけるの妻がいる。」

ここにこそわが北の方はいできぬれ。あつぱれとく近づけかし、いだきつかん、口をも吸はばやと思ひて、手ぐすねをひき、大手をひろげて待ちあたり。女房これを御覽じて……あな恐しや、あのあたりをばいかにして通るべきぞとて、よけ道をして通りける。物くさ太郎これを見て、あらあさましや、あなたへ行くぞや、手のびにしては叶ふまじと思ひて、大手をひろげてつと寄り、いつくしげなる笠のうちへ、きたなげなるつらをさし入れて、顔に顔をさしあはせて、「いかにや女房」といひて腰にいだきつきて見上げければ、東西くればて、さらに御返事もたまはず。女房は「大和ことば」でのがれようとするが、太郎の即答はそれをゆるさない。つぎに歌をよみかけてこまらせようともこころみた。「貧の盗みに恋の歌」ということわざがある。いつも貧ではあったが、盗みなどしたことの無い太郎は、ここで恋ゆえにいぞよんだこともない歌をよまなければならなくなった。歌は意外にもすらすらと口をついてでた。窮地に追いこまれた女房が、「思ふならとひてもきませ わが宿はからたちばなの紫の門」という謎歌をかけ、ちよっとのすきにかれを振り切つて一目散ににげる。あなたの小路、こなたの辻を「わごぜはいづくへゆくぞ」とばかり追いまわ

したが、とうとう見うしなってしまう。太郎はあらためて女の残した謎歌を手がかりに、かの女の住まいをさがし求める。⁽⁶⁾ようやく家をさがしあて、広縁の下にかくれていると、上で女房と下女が先刻の恐怖を語りあっている。猛然とおどりがつて、女房を家のなかへ追いこむ。女は男の強引さに押しまくられ、また、かれのなみなみならぬ和歌・連歌の才能に感じ、「これも前世の宿縁」とかんがえなおし、ついに太郎と契りを結ぶ。実際にこんなことがあったかどうかは問うところではない。しかし、貴族的な矜持が、庶民の厚顔無恥に席をゆずらねばならない時代は、現実にも、もうその辺まできていたのだ。やがてこのことが内裏に聞え、お召しがある。いまは見ちがえるばかりに立派になった太郎を引見し、非凡な歌才に驚嘆した帝が、かれの先祖をしらべさせると、かつて信濃に流された深草の天皇の皇子二位の中將こそ太郎の父であることが判明する。太郎はただちに信濃の中將に任ぜられ、甲斐信濃の国司となり、妻といっしょに故郷へ錦をかざる。

あたらしの郷の地頭、左衛門尉をば、忠深き人なればとて、甲斐信濃両国の総政所に定め給ふ。又三年養ひたる百姓にも、みな／＼所領を取らせて、わが身はつかまの郷に御所をたてて、眷属を置き、貴賤上下にかしづかれ、国の政おだやかにありしかば、仏神三宝の加護ありて、百二十年の春秋を送り、御子あまた出できて、七珍万宝に飽き満ちて、長生きの神となり給ふ。殿はおたがの大明神、女房はあさいの権現とあらはれ給ふ。

御伽草子『物くさ太郎』が、『おたがの本地物くさ太郎』とか『おたがの本地』とかいう書名でもつたえられているのは、このように物語りの結末が本地物の体裁をとっているためにはかならない。

『物くさ太郎』の後半を、「面白からず」と見るにせよ、また、前半との意外な対照の奇抜さに趣向をみとめるにせよ、本書の構想上の問題点が、「ものくさ」から「まめ」へという転換そのものにあることだけは動かない。

柳田国男もいうように、「高名なる物臭太郎の御伽を初として、民間には三年寝太郎の聾入譚の如く、凡人の眼にはなまけ者の役に立たずとしか見えなかった若者が、後に万福長者となつてめでたしめでたしを告げることは、殆ど昔話の常例であ」(『猿地蔵』『昔話と文学』)った。その三年寝太郎型の昔話の一つに、「二十五の寝太郎」という話がある。寝太郎は二十五にもなるのに、はたらきもせず、寝てばかりいる怠け者だった。仲人ずきの爺さんが嫁を世話しようと申しでる。近所の人びとは、みな怠け者の寝太郎を知っているのに、わざと三里も五里も離れた在所の分限者の家に縁談をもちかけ、その娘をもらうことにした。花嫁の駕籠がつく。きてみると、竹の柱にかやぶきのひどい小屋である。それでも花嫁はよろこんでかれと夫婦になった。里がえりの日がきて、二人は妻の実家にまねかれる。家人の眼にうつった寝太郎は完全な馬鹿騷だった。寝太郎は、風呂にはいれば洗い粉を食べてしまふし、寝所では枕というものを知らず、二つかさねてその上に寝るといふしまつである。あまりの馬鹿騷におどろいて、仲人の爺さんと呼んで聞いてみると、爺さんは、「ああ今晩は私達の氏神さんのよみやの晩で、これが所の風ぢや。このよみやの晩では粉ぢやつたらなんの粉でも食べるし、枕